

総合俳句論

―多様な俳句への新たな展開を―

第二章 日本の俳句

3 俳句を読む② ―句集の序―

(1)高橋正子句集「花冠」

正子さんの俳句は、インターナショナルであり、インターネットである。

ベルリン

カスターニエの青き実曇天よりもげば

この句は、ドイツの句会に家族で招待されたときのもので、カスターニエと曇天というドイツの風土にふさわしい言葉を使つて、季感溢れる風景を詠むことに成功した。この句には、季語はないが季感があつて、その奥の風土と自然を捉えた。ものの本質を見たのである。日本の風土に捕らわれずに、ドイツの風土を確かな目で見た。ここがインターナショナルである。

パソコンを消して露散る夜となりぬ

海外の俳人たちとの交流は、三十数年になり、インターネットでの俳句交流も長い歳月を経て、自らの句を育てている。

来たぞ来たぞいつもの目白が蜜吸いに

野ばら咲く愛のはじめのそのように

スリートピー眠くなるほど束にする

白バラの空気を巻いていて崩る

胸うちに今日の夏野を棲まわせる

これらの句は、俳句が詩であることを教えてくれる。言葉のいきいきとした律動があつて、紛れもなく詩である。在り来たりの五七五という音数律に縛られたものでなく、作り手自身のリズムがあつて快い詩情が伝わってくる。

正子さんの俳句の基本を指導したのは、川本臥風で、その先生が臼田亜浪なので、その影響を素直に受けた。自由であつて、ものの本質を見ることを学んだ。さわさわと吹く風に深さを感じ取るように、句がさわさわとして深いのは、その成果なのである。

さわやかに行きし燕の戻り来る

春の露提げしわれにも風が付く

わが視線揚羽の青に流さるる

天草の乾いた軽さを腕が抱く
本句集の代表句を挙げるすれば、
水に触れ水に映りて蜻蛉飛ぶ
を採ることに、躊躇うことはない。俳句の「まこと」を読み取ることが
ので嬉しい。

平成十五年早春

(2)戸原 琴句集「空の青」

琴さんの俳句は、根っからの自由で、そこに強さを秘めている。そして、楽
しい。

春愁やあご髭があればとなでてみる

夢中になれることあり空豆をむく

サラサラと生きるのが良し星祭る

自由であれば、何事にも明るく美しく振舞う。

音涼し水の中にて花を切る

外国への荷物にそえし紙風船

こんもりとした明るさに楠若葉

琴さんは、ものを真っ直ぐ見ているので、その本質が見えている。

シャボン玉息吹き込まれ生まれしもの

朝市のぶどうの葉にのせぶどう売る

もみじ葉の触れ合う音も降りて来ぬ

雪すべて降らせて戻る空の青

これら句が世に出て多くの方々喜んでいただけるものと思い、句集「空の
青」を推奨する。

平成十五年四月

(3)堀佐夜子句集「はなむろ」

佐夜子さんの俳句は、いろいろな読み方ができるので、楽しい。美しいもの
に心が向けば、

シクラメン明日は真紅の花と思う

思いつきり水を飛ばして虹つくる

星飛ぶやカーテンすこし開けて寝る

という句が生まれ、小鳥たちに心が向けば、

清明の空へ真っ直ぐ鳴く小鳥

雀の子のんど上げつつ水を飲み
揚雲雀鳴きて鳴きつぐ野の道を
初蝶の見えなくなつて白い空
揚羽蝶朝の日差しにひかり飛ぶ
河川敷あきつ飛び交い空青し

という句が生まれ、無邪気な童心があつて、芭蕉の教えを思い起こす。

麦藁帽朝の挨拶して通る

つつじ咲く路地に来ているパン屋さん

幼な名を呼ばれ振り向く秋祭

かしましく来て新米を置いて行く

これらの句では、作者を取り囲んで、昔ながらの共同体が生き生きとして楽しい。

家庭では、

十三夜と言う吾に歌い出す夫

と詠んで、ここでも楽しい生活があるが、

カトレアや何処へも行けぬ妻なれば

光るものひとつ身に付け冬の街

と詠んで、佐夜子さんの厳しい境涯を語ってくれる。

白露の夜パソコン俳句麻痺の手ぞ

車椅子降りてふらここ漕いでみる

炎天下影短くて車椅子

若草に我が両足を立たしめる

佐夜子さんは、脳性麻痺という重度の障害者だが、天性の明るさと無邪気さが強さとなって、周囲の人たちに元氣と勇氣を与えている。パソコンを駆使した俳句には、眼を見張るものがあつて、これが佐夜子さんの前向きの強さなのである。

鳥図鑑さがすパソコン春灯に

佐夜子さんの俳句には、しっかりしたものがあつて、読んでいて安心できるが、生活態度がしっかりしているからで、よい俳句は、よい生活から生まれるものだと教えてくれる。

竹涼し青き日差しの幾筋も

眠りても十六夜の月光胸に

露草の青い空気へ車椅子

オリオンを傾けさせて冬が来る

これらの句のレベルの高さをうれしく思い、句集「はなむろ」を世に送り出すことを喜ぶ。

平成十五年初夏

(4)原 順子句集「花菖蒲」

原順子さんの人生は、決して平坦なものではなく、家族ともども、社会の激動に翻弄された。日本国家の運命とともにあって、敗戦の苦難を少女時代の体験とした。順子さんが少女時代を過ごしたのは、北朝鮮の羅津で、その直ぐ近くでロシアと中国と北朝鮮との国境が接しあっていた。父君は、旧満州鉄道に勤務しておられた。

ポプラ茂る未だ国交無き母校

桜草鈴蘭の季の羅津が好き

昭和二十年八月九日のソ連参戦までは、戦時中と言え、子ども達は平和な日々を過ごしていたが、それからの生活は、

機銃掃射夏草の壕に辿り着く

霧しるけき路傍幼なの冷え逝きぬ

兵の屍をそむけつ歩む炎天下

霧深し野宿の群れは日本人

となつて、百八十度転換とは、このことであろう。

順子さんの句には、折々の感慨が率直に述べられ、人生を語ってくれる。

生真面目が世に疎まるる春愁う

子を持たず数の子を食む音哀し

恋すてう記憶はおぼろ桐の花

我が人生楷書で生きよ五月晴れ

順子さんの女性としての感覚を見せ、しかも力強さがあって明るいの、花の句で、

一筋の葉脈強し花菖蒲

紫陽花まん丸ひと花ずつの個性

明るさは花舗から菜の花金盞花

食の句も、順子さんらしさがあって、作者を取り囲む人々のいい姿が見えてくる。

ペーチカで母手作りの焼リンゴ

春野菜両手に友の笑顔と逢う

流しには小鯛ピチピチ山うども

山椒の芽香る厨に味噌を播る

巻寿司に阿波の祭をなつかしむ

幼い子ども達と接すると、苦勞をした人にある特有の優しきを見せる。

線香花火へっぴり腰の児の指に

児の相手切符は萩の花もあり

原順子さんは、七十年近い生涯を正直に生きてきたし、これからも正直に生きてゆくことであると思うが、正直であることは、強く、そして優しくあることでもあるかと、そのことを嬉しく思う。

平成十五年夏

(5)藤田裕子句集「春の露」

藤田裕子さんの俳句は、学生時代に始って、細く長く続けておられるので、一言で言えば、おとなしい句柄だが、一つの芯が通っている。作者の人間性が見え、その生活がいい。

子の寢息軽やかなりし春の宵

春の露シャキシャキとして母の味

父の墓石洗う秋暑き日に

梅檀の花蔭に入る旅の朝

抜きたての大根ずしりと土の匂い

白味噌の雑煮囲みて恙無し

この作句態度は、句歴四十年を経て、些かも揺るがない。句のすべてが明らかで、言葉に偽りが無い。

平成十五年夏

(6)柳原美知子句集「島の春」

美知子さんは、英語教師としてのお勤めがあるが、本句集に見るその姿は、妻として、母としてのよい生活である。一家の日常を支え、家事に専念すれば、

露ゆでて野のかおり満つ真夜中に

詰め放題ビニール袋に空豆鳴らし

菖蒲切る音軽やかに湯に放つ

刃の入りてたちまち西瓜の水匂う

という句が生れ、そこに充実した生活があり、

夫に子に善哉作る幸せを

と詠む偽りのない幸せは、読み手の共感を呼ぶ。家族を気遣う心は、

二男悠二郎小学四年

連れ帰りし風邪引きの子の機嫌よく

紅生姜添えて栗寿司巢立つ子に

夫博の手術

鴟鳴いて術後の空気澄みわたり
といった句に読み取れ、これらの句の目立たない、特別でないところがいい。
家庭の日常は、「無事は大事」ということが何よりで、そこが詩となったのが
素晴らしい。

高校の英語教師としての生活でも、家族的な温かさがある。

初栗の輝き分け合う職員室

遠足

にぎり飯豌豆添えて子に分ける

教え子の児を抱き来たり新緑を

家庭生活の良さがそのまま職場生活でも変わることがない。どこまでも母であって、それは、昔からの日本の母の姿である。やさしくて、芯のある母の姿を見る。家庭と職場を離れての秀句は、

我が身より影出て動く春燈に

溪流に十指を浸す夏の終わり

雲流る空を降りくる赤とんぼ

があつて、その内面の充実を知って嬉しい。

平成十五年晩夏

(7)古田けいじ句集「木の実独楽」

けいじさんの代表句と云えば、

アンネ・フランク展

咲きかけの黄薔薇とアンネフランクと

を推挙するに躊躇うことはない。戦争の犠牲となった少女アンネの悲しみが「咲きかけの黄薔薇」となって、人間らしいやさしさが美しい。

白桃が三つテールにある平和

作者のしみじみとした思いが伝わってくる。平和は、美しいものであり、豊かなものである。国際社会がそうあつて欲しいと誰もが願ひ、それぞれ家庭の中もまた同じ思いである。

木の実独楽歩き始めし子へ廻す

肩の子が先ず受けている初日の出

幼子が体重乗せて抜くラムネ

孫の句は難しいと言われるが、けいじさんは別で、やすやすと作っている。心がしっかりと幼子に向けられているからで、可愛さだけの無責任などころは全く無い。妻を詠んでは、

崖下に妻を残してたらめ摘む

静かなり妻と来ているバリ良夜

という句があつて、こうした句は、作者の生活の良さから生れたもので、ふるさとの飛驒の思い出もいい。

落鮎や寡黙の父は飛驒の川

焼き茄子や生醬油だけが飛驒の味

けいじさんの句のレベルの高さは、芸術や文学に向かう心の高さであつて、学生時代からの合唱の仲間達で育ててきたものであろう。

花浮かぶ水門へ春潮上がり来る

そこに光り集めて木屋落下する

三月の握手の骨も焼かれけり

これらの句が本句集刊行によつて、多くの人々に読まれることを嬉しく思う。

平成十五年晩秋

(8)祝恵子句集「藤棚」

祝恵子さんとの初めての句会は、大阪城の近くで、そのときの句は、初心者とは思えないレベルの高さがあつた。写生を超えて作者の心境を詠んでいた。

大阪城

空堀をのぞけば深し蟬時雨

恵子さんは、寡黙なので、それが幸いして観察の眼がいいのである。深くを見ているのである。

幼子たちを見ている、孫たちを見ている、対象に溺れることがなく、行き届いたところの優しさがいい。

幼子は見るとび丸く初笑い

園児らは指めがねで春空さがす

キャンプ地へ子は長靴を持ってゆく

児は透けし袋に水着持ち帰る

またあした子らは手を振り大晦日

恵子さんの俳句の良さは、日頃の生活の良さから生まれたものに違いない。台所を預かつて身近な句材を詠んだ句がいい。

水満たし七種の色浮かしおり

冬瓜の清しき白をサクと切る

秋野菜重さを胸に抱きもらう

白菜は真二つに割かれ干されおり

家族を詠んだ句に

初節句子に孫に喜びもらう

夫と飲むラムネ昔を透かし見る

があり、思いが率直である。

佐賀の実兄山口年也

がつしりと藤棚作り房あまた

この句は、恵子さんの代表句の一つだが、「がつしりと」がよく、「房あまた」がいい。家族のいい絆を読み取ることが出来る。

恵子さんは、家族という共同体の要に居られるが、私たちの雑誌「水煙」という共同体の要の一人でもある。水煙の全国大会では、いつも受付を引き受けていただく。水煙の大阪事務局では、そのスタッフとして堀佐夜子さんと働いていただく。

句集「藤棚」は、私たちの「水煙」を代表するもので、この句集を世に出すことが出来たことを嬉しく思う。その中の句で、私の最も好きなのは、

蒲公英の数本は吾が影へあり

である。控え目であって、優しく、観察の眼に深いところがあるのは、恵子さんらしい。

平成十七年六月

(9)平田弘句集「翔ける」

弘さんの俳句は、その姿勢が正しいが、自然体で、力が入ったものではないので、読み手に伝わってくる調べがやさしい。

湯河原

梅林を透す日差しが空の色

安曇野

山葵田の水清ければ音も澄み

木の独楽の色鮮やかに回りだす

この快い正しさは、長年の精進の結果で、日常生活の正しさでもあらうと思う。

あせらずに只ひたすらに田草取る

鳴るまでを草笛替えて吹き続く

秋高し図書館に通う脚軽き

弘さんの俳句は、八十歳を過ぎてから始められたものなので、穏やかな句が殆どだが、回想句を読むと、青年時代の過酷な歳月がある。第二次世界大戦でのニューギニア戦線では、「沼地の露宮」という前書きの

露営地を夜中に通る鰐の跡

があり、「出発の間際の高熱の教え子をテントに引き取る」という前書きの

看取る友最後の叫びに母と言う

がある。弘さん自身は、

敗戦日迷迷として生を選ぶ

の句を残した。「生を選ぶ」ことによって、ご両親に如何ほど喜んでいただいたことであろうか。また、ご家族の「生を選ぶ」ことでもあった。父母の句に

捕虫網担ぐ後ろに父の影

切干の日向の香り母の味

があり、また、妻子を詠んで、

妻田鶴子

花束の中より散らばる実千両

長女純子

獅子舞を手振り身振りで子に教え

があり、弘さんは、優しいのである。この優しさが「生」を選んだに違いないが、芯の強さがあつての優しさである。

自宅

茄子の苗己に見立て骨太に

岡崎に住みしころ

蓮根掘る節を連ねる逞しさ

句集「翔ける」を読み終え、私も「生」を選んだことを句集の作者とともに喜びたい。その実感は、この句集出版によって得られるに違いない。句集「翔ける」は、多くの読者を得て、「生を選ぶ」ということに共感を抱いていただくことであろう。

平成十七年夏

(10) 下地鉄句集「伊集の花」

下地鉄さんは、那覇の隣の浦添に住んで、沖縄の身近な風物を詠んでいる。

やんぼる

山原路香り辿りて伊集の花

マンゴ切る種子の平らに逆らはず

受け継ぎし俎板ありて瓜きざむ

冬ゴーヤ濃き緑をばぶつ切りに

伊集の花は、梅雨の頃、山原（沖縄本島北部）の山々に真白な花を咲かせ、ほのかな香りを漂わす。ゴーヤは、沖縄の野菜だが、今は、四国でも店頭にあ

る。

下地鉄さんは、身近なところに強い関心をもつて、沖縄の佳句を詠まれるが、亡き妻を詠んでも読み手に訴えてくるものがある。

君愛でしつづじを活けて仏間かな

紫桔梗つぼみの俣を妻に剪る

第二次世界大戦が曾てあったが、六十年前の凄惨な沖縄戦を忘れてはならないであろう。

滴りに母呼び果つる壕の戦友

沖縄忌残りし友と電話する

海鳴りの遠くにありて慰霊の日

句集「伊集の花」は、力のある句が揃った。その中での私の好きな句を挙げるとすれば、

守宮鳴く人の恋しき夜となり

コスモスの触れ合いながら日を惜しみ

薄穂の一揺れごとの日を反し

がある。これらの句が世に出て、多くの読者の共感を得るに違いない。

平成十七年六月

(1)河野啓一句集「せせらぎ」

河野啓一さんは、旧制高校の時代があつて、そこでの生活が俳句に影響を与えたに違いない。職場の第一線を引かれてからの多彩な生活は、若い頃に培った教養によるもので、医薬文献の翻訳、軽スポーツ、旅行、園芸、絵画、そして俳句などがある。

虞美人草風に揺らせて画布のなか

本句集には、画の俳句が多いが、その中でも、この句が優れていて、そこには詩がある。

蒲公英の種ふと浮び空の詩

大空のひろがり、その焦点に浮かぶ「蒲公英の種」、そのイメージに詩情があり、言葉のリズムにも音楽的な詩がある。中七の「種ふと浮び」は、二音二音三音のリズムで、その後の切れがいい。

ご夫妻揃っての絵画の生活は、日常にいいリズムを作っておられるのだが、そのリズムが崩れたときの句は、妻を詠んで一見穏やかな詩情がいい。

妻病みて山茶花の花咲きこぼれ

妻病みし初冬の日差しまぶしかり

家族を詠んだ句に佳句があつて、これらは、日常の生活の中から生まれたもので、その俳句は、その日常と切り離すことが出来ない。

長男浩一家と生駒の觀光農園

鋏音も高く甘藷を掘り当てぬ

戸外での家族の楽しい団欒があり、孫娘を詠んでは、

クロッカス摘みて持ちくる孫娘

の句がある。父の日にハイビスカスを贈られて

ハイビスカス真っ直ぐ我に向きて咲く

と詠む。家族との絆が確かなのである。

また、啓一さんの句には、趣味が園芸ということもあつて、草花の句が多いが、家庭菜園を詠んだ句に

京野菜摘みしばかりの涼しさに

等の佳句がある。

啓一さんは、大阪大学大学院で生物学を専攻されたので、植物に詳しいのは、当然のことだが、それが学問に終つてしまわないで、詩となつているのが素晴らしい。それも生活の詩であつて、そこには、現実があつて、真実がある。

本句集にアメリカ留学時代の回想句

サンフランシスコ

茹で蟹を漁師波止場に購えり

があり、ウイーン旅行では、

ホイリゲのワインに酔いて風涼し

の句がある。ウイーンの森が見える郊外の酒場であろうか。「ホイリゲ」は、「今年の」というドイツ語で、ワインの新酒を飲ませるウイーンの酒場のことでもある。ウイーン体験のある者に懐旧の思いを抱かせてくれる。

啓一さんの句は、その海外生活の体験があつて、広々としたところがある。

句集第二句の

はるばると黄砂飛び来て吾が門に

は、中国大陸からの「黄砂」を詠んで、「吾が門に」という焦点が絞られ、その焦点からの広々とした自然を見ている。

河鹿鳴くせせらぎの水汲み帰る

本句集の代表句であつて、ご両親の郷里である四国の溪流を詠んだ。故郷の自然がいい。広々とした自然の中の「せせらぎ」の音が聞こえてくる。その音は、深くから聞こえてくる。

句集の題名は、この句の「せせらぎ」から取ったもので、作者自身が選んだ。

平成二十年盛夏

(12) 矢野文彦句集「樟」

矢野文彦句集『樟』は、有季定型を食み出すことがなく、特に目立ったところは無いのだが、句の芯に強さがある。それは、作者の内面の強さでもあり、生まれながらにして身に付いているものである。作者は、物心ついた頃には既に重度の障害者であった。

ふり仰ぐ天の深さよ春の雪

車椅子落花を運び戻りけり

年来る分相応の欲は捨てず

車椅子を詠んだ句に佳句があり、生活に明るさがあるのは、作者の内面の強さがあったことである。

薫風や電池換えたる車いす

車椅子薄一本挿し戻る

作者の明るさは、生まれながらのものであろうが、親兄弟といった温かい家族があったからでもあると思う。亡き母を詠んだ句に

亡き母の植えて好みし乱れ萩

があり、アメリカ在住の弟との交流では、

外つ国の大年を聞く初電話

という句があつて、世界が広がる。

少年時代の回想句は、

ぽっぺんが割れ大泣きの遠き日よ

少年に空青かりし終戦日

などに、喜びも悲しみもあつて、心に残る思い出がある。

蟋蟀の入り来し部屋の灯を消しぬ

身のほとり清めるだけの大晦日

着メロによるこびの歌年送る

これらの句は、一人で居るときのもので、わが身に合った生活がいい。介護の世話になれば、その人達との交流がいい。

祖母を語る若きヘルパー草青む

介護ヘルパー時間励行息白し

初風呂や介護の視線全身に

七夕竹に一日華やぐデイの部屋

障害者の生活は限られているが、楽しさがあれば、明るい。

空に鳥地に蝶が舞い夏至暮るる

チューリップどの色が好きみんな好き

飲み余すワインの壇に夜長の灯

矢野文彦さんは、昭和五年生まれで、十月になれば、七十九歳となり、八十歳の傘寿がすぐそこである。矢野文彦さんの永い人生があつて、その人生を丁寧生きてきた。そのことを句集『樟』が語っている。その代表句を挙げるとすれば、

樟若葉大きな空はそのままに

人見えぬながら春田となつて来し

立葵明日の高さを目で測る

であり、明るいと場所があつても、浅きに流れていないのである。

句集『樟』が多く読者を得て、その俳句が人生の励ましともなればと願っている。

平成二十一年二月

(13) 高橋秀之句集「南港」

高橋秀之さんは、大阪に生まれ、大阪で育つたので、大阪の良さを身に付けている。その俳句にも人間らしい暖かさがある。職場は、大阪港で、そこは、海の彼方へと大きな世界が広がっている。

貝寄風に吹かれて広き大阪港

桜舞う天保山に船が入る

大阪の街と人によって育てられた俳句は、大きくて、安心のできるもので、読み手の心に触れて嬉しい。俳句が大きいばかりでなく、ひろびろとした世界を展開する。

大空へ放つ七色出初式

さよならの声高らかに日脚伸ぶ

三が日溢れんばかりの靴の数

本句集は、ふるさと大阪を詠んだ句に良い句が多いが、日常の家族を詠んで佳句を得た。三兄弟を詠んで、句が生きいきとしている。家庭のいい生活を見せられる。

春の夜や寄り添い眠る三兄弟

菖蒲湯が狭しと浸かる三兄弟

家族と居る生活が楽しい。誰もが思い出に残す楽しさが俳句にある。

抱き上げて葡萄の房が子の高さ

堤防のもの芽踏んで鬼ごっこ

朝日浴びゆらゆら揺れるしやぼん玉

行楽の帰り優しきいわし雲

母や妻を詠んでも、その暖かさに変わりがない。

梅を干す夕暮れ時の母と妻

秋茄子を洗う妻の手紺が付く

秀之さんの大きくて暖かい世界は、虫の声や赤とんぼを捉えて、

子の眠る深夜の部屋に虫の声

キャッチボールする間をすつと赤とんぼ

という俳句が生まれた。子ども達と虫達が共に生きる世界は、生きいきとして
いる。ひろびろとした未来があり、見ていて楽しいのである。

趣味のマラソンでは、妻子を連れての海外旅行となる。子ども達にとっての
何よりの体験で、この体験は、大人になっての生活で必ず生きてくる。

汗拭いゴールドコースト走り抜け

赤道の陽の眩しきは雲の海

SLなどの列車にも関心があつて、家族との旅がある。

SLの蒸気の匂い秋初め

秋の日を背負いさよなら列車行く

職場の仕事を忘れることがなく、楽しいことがある。

鮮やかに仕事始めのはんこかな

本句集は、作者の生活断片を切り取り、それらを繋ぎ、作者の総体を表現し
た。大きな世界である。

句集「南港」の中でも私の挙げる代表句としては、

夕焼けの温もり抱いて子ら帰る

店先の蜜柑一盛り崩れ落つ

暗がりて冬帽子脱ぐ通夜の列

である。生活の断片をさり気なく切り取り、深いのである。本句集は、日常に
あつて、大きな世界を展開し、明るくて深いところを目指した。そこが嬉しい。

平成二十一年早春

(14) 飯島治朗句集「雲梯」

飯島治朗さんは、祖父以来三代に渡る教育者で、その俳句の主なもの、子
どもたちと接する日常の生活から生まれた。子どもたちを見守って、その視線
が暖かい。

子ら遊ぶおしくらまんじゅう花辛夷

のぼり棒上りゆく子へ青葉風

枯草の土手を声あげ滑る子ら

教室の風景を詠んでも、子どもたちの心との触れ合いがある。

長廊下歩けば触れる七夕笹

教室の青いバケツに花すすき

街角で出会った子ども達は、

手を挙げて渡る双子の夏帽子

お揃いの双子のTシャツさくらんぼ

と詠み、作り手の心が読み手に伝わってきて、その快い読後感が嬉しい。

家族を詠んでも、作り手の心が快く伝わってくる。

しゃぼん玉パツと弾けて孫の顔

朧月長寿の母は寝ています

作者のいい生活は、いい俳句となつて、読み手を喜ばせてくれる。嬉しい俳句である。

作者のこうした暖かさは、ご自分の家族や教え子達に限らない。施餓鬼会にあつても、さり気なく句を詠んで飯島治朗さんの心を見せてくれる。

施餓鬼会や新盆の家前列に

草花や大空に目を遣れば、それらとの出会いに作者の内面の深いところを見せてくれる。

明るくてコスモス一輪ありて足る

青穹や地上の秋を明らかに

芭蕉が遺した言葉に「高くところをさととりて俗に帰るべし」がある。飯島治朗さんは、学校生活では、子どもたちと同じレベルにあつて、明るくて浅いところに居るのだが、その内面は、高くて深い。それは、治朗さんの俳句を読めば、明らかである。

本句集「雲梯」の代表句として、次の三句を挙げる。

雲梯を渡り行く子の空高し

かいつぶり潜り水輪を離れ出る

平らかな冬田の向こうに富士聳ゆ

これらの句は、ごく最近の句であつて、その成長を嬉しく思う。俳句の技巧的な上手さといったことではなく、作者の内面の深さ、その高さである。それが俳句の言葉に現れているのである。

平成二十一年早春

(15) 小川和子句集「花影」

和子俳句には、どこか洒落たところがあつて明るい。派手なところがある句柄ではないの面白い。北海道の風土の中で育ち、大学の英文科で得たヨーロッパの教養がいい結果を生んだ。美しい句だ。

白梅の満ちて高きへ香をはなつ

風に鳴るなずな花咲く地の起伏
さよならの子らに満月みずいろに

北海道立余市高校時代

朝ぼらけの青き雪踏み通学す

和子さんは、家庭の主婦であって、その生活から優しく美しくて美しい句が生まれる。

青紫蘇を水に放ちてより刻む

硝子戸を青一色にクローバー

主婦としての生活は、

障子貼る今日はそのこと念入りに

の句に、そのすべてを語ってくれる。日常に油断がなく、気負いもない。

子どもの世界を詠んだ句には、

花影に歓声あがる滑り台

縄跳びの子らに校庭長四角

信号を待つ間も春光子らにふる

自転車置いて子ら寄る蝌蚪の池

があって、明るくてレベルが高い。長女真理さんの成人式では

晴れ着の子に冬天限りなく青き

と、未来があって明るい句を詠む。

学生時代からの信仰生活を詠んだ句では、

真っ白き一樹と出会うイースター

があって、和子俳句の代表句としたい。新鮮な驚きがある句で、下五の復活を意味するイースターが詩の言葉として生きいきとしている。どこか洒落たところがあって、読み手を惹きつける句である。

句集「花影」を世に送り出すことを嬉しく思い、多くの読者との出会いによって、また新しい命を吹き込まれるであろう。

平成二十年秋

(16) 藤田洋子句集「梅ひらく」

本句集「梅ひらく」を読めば、作者は、家族を何よりも大事にし、日常生活を疎かにしない方であって、俳句という詩の言葉でそのことを隈なく表現した。いい生活からいい俳句が生まれた。

夫や子に囲まれて、

ひと部屋の灯に集まりて晦日蕎麦

の句、亡き父母を詠んでは、

父の日の山の青さに真向える

冬灯し母の箆筒を引けば鳴る

の句があつて、父母を想う情が作者の深いところで句となった。第一句の「青さに真向える」、第二句の「引けば鳴る」は、作者の感性が捉えたもので、読者の心深くに訴えてくる。兄を早くに亡くした作者が実家の父母を一人で看取ったことを知れば、なお強く訴えてくる。

秋彼岸手に置く兄の文庫本

専業主婦としての日常生活を詠んだ句に

ペダル踏む籠に落葉とフランスパン

があり、読み手も楽しませてくれる。季語「落葉」が効いて、生活の実感を伝えてくれる。

手のひらに塩あおおと胡瓜もむ

窓に干すハンカチ白し十三夜

これらの句も日常生活を詠んでレベルが高い。「あおお」や「白し」といった色彩の感覚の良さによるものである。

新任の地へ向く朝浅蜷汁

この句は、夫を詠んだものだが、言葉が少ないのがいい。夫婦の日常を詠んで充分である。

冬椿嫁ぎ来しよりこの庭に

装いの帯高く締め成人式

などの句があり、嫁ぎ来て三人の子を育てた。作者とは、十四年間の俳句のお付き合いだが、子育ての十四年間に俳句で見てきた。

いつてきます声も大きく遠足へ

日焼け子が海の香させて寝息立て

風邪の子と古きアルバムめぐりおり

これらの句では、子らと共に居る母親のやさしさを知る。

俳句の仲間との集まりでは、

生き生きと声が動いて初句会

の句が新鮮で、横浜の俳句大会に参加しては、

海見えて落葉の芝に旅鞆

と、旅の句を詠む。

本句集の題名「梅ひらく」は、

梅ひらく白のはじめを青空に

の句から作者自身が付けた。作者らしい感性がいい。

代表句は、

遠ざかる風船は今空のもの

湯のはじく乳房の張りよ夕月夜

海見える丘に椎の実拾いけり

冬木立つその確かなる影を踏む

であつて、十四年間の俳句生活を経て、その成長は明らかである。感性のみずみずしさがあつて、実家の父母を看取るという苦しみと悲しみを体験し、内面の深みが加わつた。句集「梅ひらく」を私たちの「水煙」の仲間から世に出すことを嬉しく思う。

平成二十年八月

(17) 黒谷光子句集「能笛」

黒谷光子さんは、近江商人発祥の地である五個荘のお寺に生まれ、湖北のお寺に嫁いだ。琵琶湖周辺の豊かな自然と歴史のある伝統に恵まれ、そこから句集「能笛」が生まれた。

湖(うみ)の街歩き梅の香のいくたびも

片脚は湖に大きく春の虹

湖北の灯近づき冬の旅終る

琵琶湖の西の対岸には、比良山地が連なり、

比良を背に菜の花明かりひろびろと

の句を詠む。お寺の境内の裏からは、東に伊吹山が見え、

伊吹嶺に一片の雲秋高し

など、琵琶湖周辺の美しい風景が句集「能笛」の背景であり、作者の生活の場である。

光子さんの大事なお仕事として

朝の鐘撞く境内の雪明り

み仏の座の春塵を拭いけり

朝日差す御堂へ今日は豆御飯

など、お寺を守っておられ、お寺のお勤めの句では、

涅槃会

悲しみの姿さまさま涅槃絵図

花祭り

乾きても濡れても光り甘茶仏

がある。日常生活では、

大き蕪一つを抜きて提げ帰る

俎板に溢れしやきしやき水菜切る

選り終えて夜の灯りに青山椒

の佳句があつて、家庭の主婦としても堅実なのである。家族が集まれば、

みどり児を囲むうからの冬座敷

という団欒の句が楽しい。孫の句は、

この家に幼も眠る二日の夜

少年の書き初め希望と紙いっぱい

があり、嬉しい生活がある。

本句集の題名「能笛」は、

長浜八幡神社新能

能笛の秋夜の杜へ風と消ゆ

という句から付けた。光子さんの句には、「能笛」が相応しい。句の姿が正しいからで、そこに深さがある。どこか素朴なところがあつて、きらびやかなところを抑えた美しさなのである。それは、日本の伝統文化の良さでもある。

光子さんの内面は、活発に働いて、その活動範囲は広いが、生活を取り囲む自然や伝統の世界と離れることはない。そこから生まれた俳句がいい。体験と生活から生まれた俳句がいい。そこには真実がある。

本句集の代表句を挙げれば、

竹林の撓みゆたかに春の雪

この道の先は海らし十三夜

などで、この美しい日本の風景に能笛を吹き鳴らしていただきたい。春雪のお寺に、十三夜の夜空に、琵琶湖の水面に鳴り響く能笛の音を聞いていただきたい。

平成二十年初秋

(18) 志賀泰次句集

志賀泰次さんの俳句は、身近なところを詠んでいるので、それを纏めて、北海道の風土性豊かな句集となった。季節の動物を詠めば、

山羊の仔の膝折りすわる草の青

仔馬蹴るうしろの海は初夏の青

閉牧の肥えし牛馬に草匂う

雪明かり牛まっくろに立ち止る

があり、鮭、鯿、蟹の句は、

一瞬の光芒みせて鮭のぼる

海のいろそのまま売らる初鯿

雪霏々と蟹荷揚げするロシヤ船

があり、北海道をありありと見せてくれる。

山には、白樺、ポプラの木々、畑地には、じゃが薯やアスパラが豊かに育つ。

枯木立白樺だけが真っ直ぐに

光りあうポプラの梢空高し

風匂うじゃが薯の花の只中に

アスパラの尖りの満ちて土かおる

泰次さんの住んでおられる網走は、流水がよく知られている。暮らしの中で流水を捉え、生活の中から生まれた俳句は、本物なのである。

せめぎ合う流水隆起海のいろ

流水の来るも暮らしの中のこと

一湾を流水埋めて春浅し

雪を詠んでも、北海道の風土性豊かな佳句があり、その一つに

雪降って降っては山が遠ざかる
の句を挙げる。

泰次さんは、七十歳になってから俳句を始められたので、句歴は短いですが、短期間で成長された。

この先の牛舎に用ありえのこ草

流水へ窓の曇りをひろく拭く

星の夜は星のいろして雪明かり

これらは、ごく最近の句で、拘りのない、いい境地にある。大病をなさって、療養の身だが、それにめげずに俳句に精進なさっておられる。

病窓に見るわが街よ美しき秋

いかなる境遇にあっても、美しいものへ心を向け、美しい言葉を書き記すことに専念する。いい生活である。

本句集が多くの人々の目に留まって、読んで頂ければと願っている。

平成20年冬

(19) 川名ますみ句集

川名ますみさんは、ピアニストとして活躍されていたが、病氣療養の生活に入り、俳句を始められた。句歴は四年で、その間の俳句は病床のものである。

つばくろの声に患者ら空仰ぐ

春光に縁取られつつ白衣過ぐ

歯ブラシを朝涼の明るきへ立て

療苑を貫き越えぬ黒揚羽

満月へ両手を広げ照らされむ

これらの句には、病者とは思えない明るさがあり、意志の強さがある。病床

にあっても、芸術家としての内面の強さを持ち続けていることを嬉しく思う。こうした俳句への姿勢は、ますみさんが物事を絶えず真っ正面から見ていることで、また、観察の対象を自分の目の高さで見ているからである。

道ひろく春山絶えず正面に

小鳥来てわが目の高さそこに置く

そして、何かを絶えず求め続けているので、それが新鮮で、読み手をはっとさせてくれる。読み手に励ましを与えてくれる俳句である。

雲の峯追うて何かを見逃せり

雪礫空に返したくて放る

残る鴨みずから生みし輪の芯に

ますみさんの句の新鮮さは、もの珍しさにあるのではなく、日常のどこにでもあつて、誰もが見ているものに作者自身の発見があることで、作者自身の驚きが新鮮なのである。療養生活の限られた中にあつても、心は自由で、閉ざされたところがない。

もう風は爽やかだから出ておいで

えのころの芯にぎつしり実の青き

ラムネ飲むきれいに響くところまで

プールから花のタオルの中に入る

長年の療養生活は、なにかと辛いものがあるうが、父母との自宅での生活に喜びがあり、安心がある。

少しずつ父はカトレア咲かせおり

空見よと扉を叩く母秋立つ日

真っ白なショールの届き誕生日

川名ますみさんの代表句としては、次の三句を採り上げる。

ものすべて光らせ来たる木の芽風

脱稿をこの日と決めし一葉忌

水のいろ火のいろ街に秋燈

本句集は、ブログ句集として世に出た。多くの方々に読んでいただければと願ひ、これらの明るく若々しい句が元気な人々にも励ましを与えてくれるに違いない。

平成20年11月

(20)水煙合同句集「橘」

水煙二十周年記念事業の一環として、合同句集「橘」を世に送り出すことを嬉しく思い、水煙誌友、そして「水煙」を永年に渡ってご支援く

ださった方々と喜び合いたいと思います。

本句集は、水煙二十年の積み重ねの大きな成果であって、私たち俳句仲間の誇りです。参加者の数は、多くはありませんが、南は沖縄から、北は北海道から寄せられた俳句は、日本の多様な風土、風景を展開し、広々とした世界を見せてくれます。日本の個性があって多様な文化を見せてくれます。

「水煙」は、故川本臥風先生の勧めによって高橋信之が創刊し、二十周年を迎えました。月刊を一号も欠かさず、明るくて深いところのある現代語の俳句を求めてきました。学生俳句からインターナショナル俳句そしてインターネット俳句を育ててきました。創刊者が愛媛大学教授であったので、愛媛大学俳句会出身の若い俳人が集まりましたが、愛媛大学俳句会は、旧制松山高校俳句会を引き継いだもので、松高俳句会は、川本臥風先生の指導によって、臼田亜浪先生の「石楠」支部として発足しました。旧制松山高校の会員に中村草田男、篠原梵、西垣脩等の人間探求派の俳人がいましたが、これらは、「水煙」の先達で、その俳句に共通するものは、「詩のある俳句」で、詩があって、野心的なところがないのです。「水煙」には、臼田亜浪先生の教えである俳句の「まこと」が生きています。

「水煙」の現在の誌友の多くは、インターネットで知り合った仲間です。インターネットは、これからの新しい俳句を創り出す大きな力となるに違いありません。創刊二十周年記念の事業の一つとして、NPO法人水煙ネットを設立しました。文学に社会的な力を持たせようとする試みで、インターネット上での活動です。「水煙」のホームページは、平成八年の開設で、足掛け八年の歴史は、俳句雑誌のホームページでは、最も長いものです。これからの「水煙」の組織は、NPO法人設立を機に、雑誌とインターネットの二つに分かれ、それぞれが車の両輪として、「水煙」の更なる発展の力となることと思います。

平成十五年晩秋